

報告 平安時代の鞠智城跡

報告者紹介

西住 欣一郎（にしずみ きんいちろう）

熊本大学大学院文学研究科修士課程修了。熊本県文化課で埋蔵文化財担当、鞠智城跡調査主査、課長補佐を経て、現在、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」館長。専門は考古学。

報告「平安時代の鞠智城跡」

歴史公園鞠智城・温故創生館長 西住欣一郎

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました西住でございます。私のほうからは、「平安時代の鞠智城跡」ということで、ご報告をさせていただきますと思います。本日は、パワーポイントを使いながら、ご説明をさせていただきますと思います。よろしくお願いいたします。

一・鞠智城跡の位置と環境

皆さんもよくご存じだと思いますけれども、ここが鞠智城ですが、九州には大宰府があつて、大野城、そして基肆城があります（図1）。それから、対馬に金田城があるわけですが、実は何でこういうふうな九州を、大宰府を守り、瀬戸内海沿岸にこういうふうにお城がたくさんできたかということをお話します。

六六三年の白村江の戦いですが、朝鮮半島は高句麗・百済・新羅という三つの国に分かれていたのですが、実は新羅が中国の唐と連合をして、百済を滅ぼ



1 鞠智城跡の位置と環境



図1 古代山城の分布



図2 鞠智城跡の立地と構造

してしまいます。百済が、日本に応援を求めてきたので、日本から応援をするために、唐と新羅の連合軍と、この白村江で戦いを行うわけです。実はこれで負けてしまうわけです。この戦いがどれだけ大変だったかというのを物語るものに、この朝倉宮というのがありますが、ここに当時の斉明天皇が天皇自ら最前線基地に來られたわけです。天皇自ら最前線基地に出てきた戦いは、この白村江の戦いが初めてであって最後じゃないかなど。それだけ重要な戦いであつたということが分かると思うのですが、これで敗れてしまつて、次は唐と新羅が攻めて來るのではないかとということで、朝鮮式山城とか、神籠石系山城、これらをまとめて古代

山城というのですが、それらを唐と新羅の連合軍が入つてきそうなルート上にお城を築いて、防衛体制を整えていったと、そのような流れになります。

これは南のほうからみた鞠智城の航空写真(図2)ですが、非常に平ら、山城というわりには平らな場所が非常に

多いというのが、一つの特徴になります。この実線で囲った範囲がお城の範囲になります。非常に大きな城ですから、現在では山鹿市と菊池市、二つの行政区にまたがる、それぐらい大きなお城になります。

現在、分かっているところで、南側に深迫、堀切、池ノ尾というふうに三箇所、門があつて、自然の地形を利用しながら、崖で囲まれていまして、そこに部分的に土でできた壁をさらに造ります。それを土塁というのですが、南側のところにこういう土塁線を築き、北側、西側のほうにも土塁を造っていくという、そういう補強をして防衛に当たっているというふうになります。

それから、本日、話をする上で大事になってきますのが、この建物が集中するところです。ここに建物が非常に集中をしています。この話と、それから、この貯水池の話をしていきますので、こういう場所にあるということを、頭の隅に置いていただければというふうに思います。

今、お話ししました土塁の長さが約三・五キロ、非常に大きいです。それから、面積が五五ヘクタールの広さがあります。それから、古代山城というわりには標高が約九〇～一七〇m、一番高い所で一七一mです。そんな急峻な山ではなく、台地にちよつと毛が生えているような感じと、そういう地形の中に鞠智城があるというふうに、まずご理解いただければというふうに思います。

二．発掘調査の成果

ここから二番目の項目に入っていきますが、これが鞠智城での発掘調査の成果、建物とか、どういう所で

生活の痕跡が地面に残っているものですから、それを見つけて調べていくと中身が分かるという、そういうものを遺構といいますが、番号を付けているのが建物跡です。それから、貯水池跡。ここに非常に大きな、なんと五三〇〇平方メートル。非常に大きな池の跡を見つけております。それから、本日お話する中でもう



図3 発掘調査の成果

出ているかという図面を示しているところです(図3)。
実は先ほどからお話がありますように、一九六七(昭和四二)年から二〇一〇(平成二二)年まで約三二回の発掘調査を行っております。私も若いときに、現場に立たせていただいて、発掘調査の仕事をさせていただきました。それに基づいて、本日ここでお話をしているという、そういうような感じなのですが、自分で発掘したところをこうやって皆さんの前でお話ができるというのはとてもうれしく、やりがいを持って今からやらないといけないなど、気持ちを新たにしているところです。

実は、本日の話のなかで一番大事なところは、「主な検出遺構」としましたけれども、地面に刻まれている昔の生活の跡のことを、考古学用語で「遺構」といいます。その

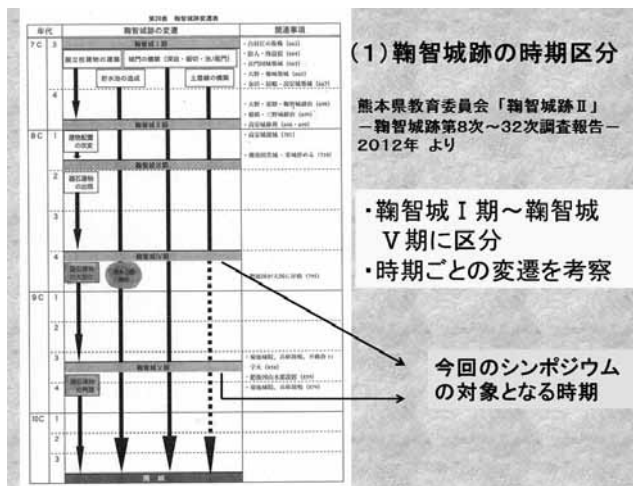


図4 鞠智城の時期区分

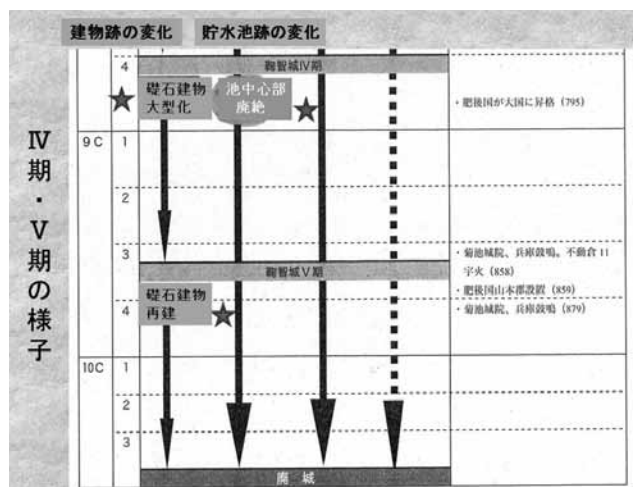
一つポイントになるのが、出てきている品物、「遺物」といいます。特に、皆さんがよく日常生活で使われる食器類がたくさん出てくるのですが、須恵器とか、土師器とかいいますけれども、そういう物も出ていますし、木簡とか百済系の銅造菩薩立像という、そういう品物が出ています。

そういう成果が認められて、二〇〇四（平成一六）年に国の史跡として指定をされています。五五ヘクタールと言いましたけれども、それを含む範囲の六四・八ヘクタールが国の史跡になっております。そういう非常に大事な、後世に伝えていかなければならない重要な遺跡であります。

（一）鞠智城跡の時期区分

本日お話する中身は、二〇一二（平成二四）年に発行しました『鞠智城跡Ⅱ』という発掘調査の総合報告書があるので、それにまとめた成果を基に、皆さんにお話をしていくところです。

その中にⅠ期からⅤ期の時代区分をやっております（図4）。それはここに示しているように、七世紀の第三四半期、一世紀を二五年ずつ区切って四つに分けるのですが、その三番目



のころ、七世紀の第3四半期ごろに鞠智城が造られて、実は一〇世紀の第3四半期、約三〇〇年間、鞠智城が存続しているということが、出土している遺物から言えます。先ほどの食器とか、そういった物です。その変化を並べていくと三〇〇年間使われているということが分かるわけです。それを使いながら本日お話を進めますけれども、私に与えられている題は平安時代になりますので、このⅣ期とこのⅤ期、後ろから二つ

の時期がこの平安時代の鞠智城になります。ここに焦点を当てて、本日はお話を進めたいと思います。

先程の図を、少し拡大をしているところ（図5）なのですが、先ほども言いましたように、平らなところに建物がたくさん建っており、それから、貯水池。実はこのIV期になりまして、それまでは建物というのは地面に直接穴を掘って、その穴に柱を建てる掘立柱という建物が主だったのですが、このIV期になるとそうではなくて、基礎となる柱を建てる石のことを礎石といいますけれども、その礎石の上に建物を建てる建物ができて、それも礎石が非常に大きくなるという特徴があります。それから、その礎石建物が実は一度、後で詳しく話しますが、この礎石建物が一度壊れたのをもう一度立て

直していると、そういった現象がⅤ期になって見られているということです。それから、池について見ますと、後でまた別の図面を出すのですが、このⅣ期になって池の中心部が廃絶といいますか、使われなくなるという、そういう事実が分かりました。何でそうなったのか分からないのですが、想像たくましく考えてみようと思います。



図6 鞠智城Ⅳ期の建物跡

(二) 建物跡の変化

これがその建物跡を具体的に見たところです(図6)。これは平安時代の最初のほうに当たりますⅣ期、八世紀の第4四半期から九世紀の第3四半期に当たる部分、ちょっと難しい言い方をしていますけれども、八世紀の終わりから九世紀の終わりというふうに簡単にいうこともできます。その黒く塗って表示しているところが建物で、構造が不明な一棟を含め一六棟の建物がもう見つかっていますが、種類ごとに分かります。先ほど言いましたように、この地面にそのまま柱を建てる、これを掘立柱というふうなのですが、掘立柱の建物も側柱と総柱に分かれます。側柱というのは建物の周囲だけに柱を立てて、総柱というのは、中のほうの床を支え



図7 60号建物跡

るための柱もあるという建物になります。それから、礎石の建物が九棟、礎石の建物か分からないのが一棟あります。それから、礎石建物と掘立柱を同じ建物に併用している建物、そういう珍しい建物があります。こういう種類の建物があるのですが、その中から代表的な建物を今から見ていきたいと思います。

これが六〇号建物といって、掘立柱建物です(図7)。人が建っているところに柱が建つということで写真撮っていますが、柱を据えるために穴を四角に掘っていくのですけれども、その跡がこの四角になっているところです。柱の中央に丸く書いていますけれども、これがその柱を建てた跡で土の質が違ったり、色が違ったりするものですから、ここに木の柱が建っていたのだなというのが発掘調査で分かるわけです。

写真を見ていて、皆さん、少し普通の発掘調査とは違うな、どうして全部掘らないんだというふうに思われていると思うのですが。実は、発掘調査をするというのは非常に格好はいいのですけれども、発掘調査をすることでその遺跡が壊れてしまうものですから、必要最小限度の事実をつかんだら、もうそこで発掘をやめて、これを埋め戻して後世に残していこうということもとても大事なことになります。

皆さん、発掘現場に行かれたりとかすると、普通だったらこれ

は全部掘ってしまいますよね、柱の建っているところを。それをせずに、こういうふうに残してあります。学問がどんどん進んでいきますので、将来また考古学の学問が進んだときに、再調査ができるような状況にして今保存をしていると、そういう状況になります。これからお見せする写真は、そういう写真が多いもので、なんか中途半端な発掘だなと感じられるかと思いますが、それはそうではございませんので説明をさせていただきます。



図8 59号建物跡

果を上げて、あとは後世に残していこうと、そういう気持ちで調査をやっているというふうにご理解いただきたいと思います。

それから、これが先ほど言いました礎石建物で、五九号建物跡です(図8)。五九号というふうに、見つけた物に見つかった順番に番号を付けていくわけです。実はこの建物を見ていただくと、周りに溝が巡ることが特徴です。これは湿気対策といいますが、侵入といいますが、そういったものから守るために特別に区画を設けた建物になります。

柱が建っていた場所に人が立っているのが五九号建物の礎石ですが、実は皆さん、他にも石がありますよね。これは何

だろうというふうに思われていると思いますけれども、実はこの建物が建つ以前の建物の一部が、古い建物がここに一部見えているわけです。ですから、この五九号建物を掘ってしまわないと、下の建物が分かりません。ですが、これ以上掘っていないくて、これで調査が終わっているわけです。建物があるというのだけ確認してやめています。

それから、溝の部分です。溝の部分が一箇所だけ、溝を掘っていません。これは、わざと溝を掘り残して、通路として使っているのではないかというふうに考えているのですが、立橋部といいます。ですから、この建物はこちらのほうから入っていくということだと思います。この部分におそらく入り口の扉があるので、ここを通路として残しているのではないかなと思います。

皆さん、もうお気づきでしょうが、手前の、小さな石は何だと思われますか。建物とは関係ないところに小さな石がありますよね。これは現場でいろいろ考えたのですが、ここに入り口があるのであれば、これは高床式の建物になりますので、扉は高い場所にあるわけです。ですから、ここにハシゴをかけて登ったのではないかと、そういうことを想像しています。発掘調査でハシゴは出てきませんでしたが、それを支える多分何らかの石だろうということで、そういうことを発掘現場で考えました。これは、ちょっと当たっているかどうかは分かりませんが、非常にその可能性高いのではないかというふうに思います。

これが先ほど言いました非常に珍しい建物で、掘立柱と礎石が同じ建物に使われている掘立柱・礎石建物併用の建物になります（図9）。非常に構造が分かりにくいので、これを思い切ってこういうものではない



11号建物跡(発掘調査時): 掘立柱・礎石併用(北東から)

図9 11号建物跡



12号建物跡(復元平面明示): 掘立柱・礎石併用(南から)

図10 12号建物跡(復元平面明示)

かなというふうに遺構を表示したのがこれになります(図10)。周りに掘立柱が巡って、真ん中に礎石の建物があるという、非常に珍しい建物です。これだけではなくて、本日後ほどお話があるかと思うのですが、大野城の中にもこういう珍しい建物を類例として挙げるができます。

次に、Ⅳ期の後、Ⅴ期です。Ⅴ期は

九世紀の第4四半期から一〇世紀の第3四半期までですが、ここで黒く塗っているのが建物です(図11)。ここに四棟、ここに一棟あります。これらはすべて礎石の建物、総柱の建物で、五棟見つかっています。先ほど、Ⅳ期では建物の礎石が大きくなり、Ⅴ期で立て直しがありますということをお話したかと思っています。その証拠を今からご報告をしたいと思っています。

これは五六号建物(図12)ですが、火災後に建て替えをやっています。何で火災かということが分かるかということの後で説明します。建物の柱が建っているところに人が立っていますが、人が立っていない少し違う石があるかと思えますけれども、これはこの建物よりも一段階古い時代の建物の礎石が、表面に見えて



図11 鞠智城Ⅴ期の建物跡



図12 56号建物跡

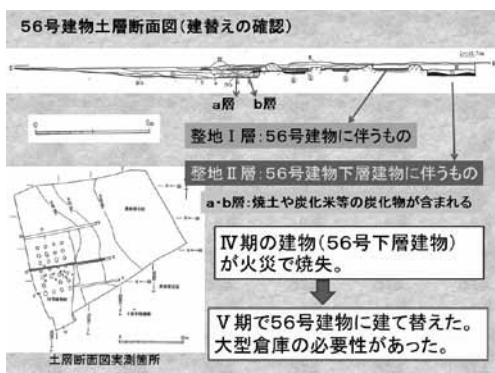


図13 56号建物跡堀断面

いるというふうにご理解いただきたいと思います。それが何で分かったかといいますと、土層の堆積を見るために少し部分的に、人工的に深掘りをして土層を見ております。それを今から説明します。

これが、建物のあるところに、下図のC、Dのところを深掘りして、土層の状況を見たところで、それを断面図で示しているのが上のほうになります(図13)。整地Ⅰ層としている部分が、五六号建物の礎石を据えるために整地をした跡になります。礎石の建物を建てる時に、きちんと一度平らにして土を固めた上に礎石を乗せるものですから、その痕跡が整地Ⅰ層になります。これをさらに先ほど言いました小さな石が

ありますよと、この五六号の下層建物というふうに名前を付けていますけれども、それがその下の、この黒く見えている部分に部分的ですけども、こういうふうにあるわけです。

それに伴う形で、ここで a 層・b 層としていますが、ここに焼けた土が確認されました。焼けた土というのは真っ赤になるので分かります、それから、炭化したお米。炭になったため、腐らずに残るわけです。ですから、この建物はお米を貯えていた倉だということがこれで分かるわけです。焼けた土と炭になったお米ということは、この建物が火災に遭っているということが理解できるわけです。この建物、Ⅳ期の建物ですよ。先ほど言いました五六号、この下層建物が火災で焼失したものですから、Ⅴ期になって建て替えをしたということになります。

何でこういうふうに建て替えをしたかというのは、鞠智城のお城の性格にもよるのですが、火災に遭ったところにまた大きな倉を立てる必要があったわけです。それは一つ、鞠智城の性格といいますか、機能を表しているのではないかなというふうに思います。

(三) 貯水池跡の変化

次に、貯水池のお話をします。これは貯水池のイメージ図(図14左)ですが、ここが水をくむ場所。ここが非常に珍しいんですけれども、建築をする材料を貯えている場所。池頭と池尻部の差が約八メートルぐらいあるものですから、水を貯えるのには、一度に貯えることはできませんので、この絵では三箇所です。切っていますけれども、何箇所かに仕切って水を貯めていた場所があります。飲み水をくむ場所、それから、次

機能的なことですぐにでも造らなくてはいけない、すぐにでも修理ができるような状況をつくっているのです。わざわざそこから木を集めても間に合いませんので、いざというときに修理ができるように建築材を貯えている、そういうのが見つかっています。古代山城の中では、今のところ鞠智城だけにしか見つからないという、そういうとても貴重な跡になります。

この表ですが、池の中心部と池尻部では少し終わり方が違うものですから、それを示しております(図15)。



図14 貯水池跡

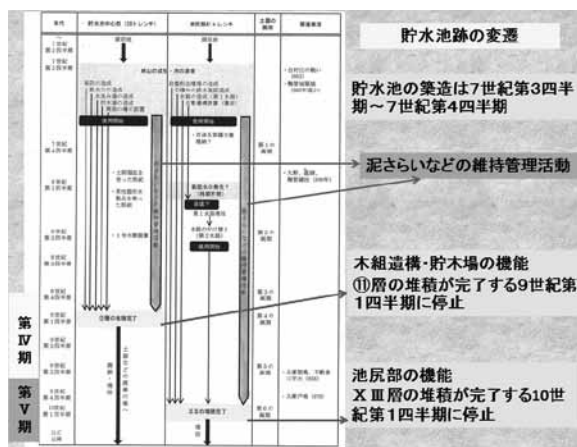


図15 貯水池跡の変遷

の区画が建築材を保管する場所といったふうに。

これがその建築材を保管する場所の写真(図14右)ですが、実はお城で使う建築材を水に漬けてわざわざ保管をしているものが見つかっているわけです。だから、非常に危

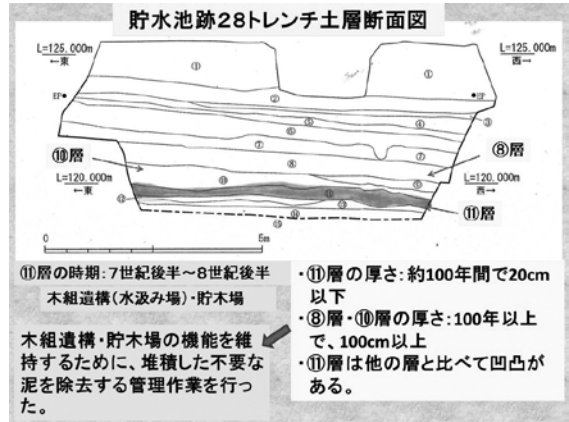


図16 貯水池跡28トレンチ尺土層断面図

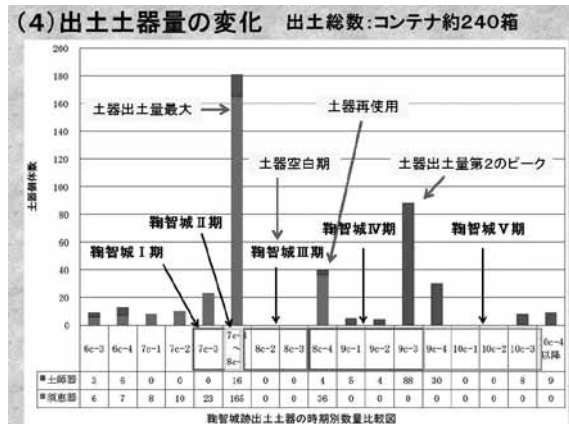


図17 出土土器量の変化

くわけです。それをやめたというのがこの堆積で分かるわけです(図16)。この木組遺構とか、そういうものももう機能しなくなったので、維持管理をしなくなり、その上に土が重なっていきます。それで一〇世紀には終わってしまうわけです。

この図をみてみますと、実は⑪層がでこぼこしています、これは泥さらいをした跡なのですが、その上の層、⑩層が堆積するということで、廃絶される。もう維持管理はしなくなったということが証明できるわ

池はだいたい七世紀の後半に造られているわけなのですが、実は池というのは皆さんよく分かっていますけれども、堆積物を除去しないと、どんどん土がたまっていって維持ができなくなります。それでいろいろな維持管理をするためには、泥さらいなどの活動をしてい

けです。それがⅣ期になるわけです。ですから、お城の性格でもう建築はいらなくなったので、池のことを管理しなくなったとということがいえるかと思っています。

(四) 出土土器量の変化

これが最後になります。実は出土遺物の変化をしていきます(図17)。これを見ると、Ⅱ期が一番最大になります。それから、土器が全然出なかった時代がⅢ期。それから、Ⅳ期になってまた土器を使い始めます。それから、このⅣ期の最後になって第二のピークが来るといいます。この土器の遺物の出土量を見ると、ここでもお城の機能を考えていく上の、一つのヒントが隠されているようになるかと思っています。

どうもありがとうございました。